

—資料4—



ハノイで教える子たちと（右から4番目が筆者）

た。フランス植民地時代の美しい町並みは以前のままであったが、人々の生活は一変していた。かつての自転車の波はオートバイの波に変わり、その警笛はさまざまだった。店には国内外の商品があふれ、人々の服装は華やかだった。町の至る所にレストランができ、いつも客で混雑していた。どのテーブルにも豊かな料理

が並んでいた。40歳近くになった教え子たちは私を自宅に招いてくれたが、私はその家の広さと生活水準の高さに驚嘆した。

ベトナムは豊かになった、と思った。しかし……。

繁華街を歩いていると、靴みがきの道具や絵葉書をもった少年たちがしつこくつきまどってきた。本屋に入ると、幼い子どもを片手に抱いた女性が手を差し出し、どこまでも追いかけてきた。公園では物乞いの子どもたちに囲まれた。先生たちは、小学校から大学までアルバイトに忙しかった。日本人のビジネスマンのためにゴルフコースが建設され、アジノモトの商業が日に何度もラジオから流れ、子どもたちはドラエモンに夢中だった。

私は心の中のベトナムとの違いにひどく混乱した。これも一種のカルチャーショックだろうか。

（外国人留学生指導センター日本語コース委嘱講師・長崎総合科学大学留学生別科助教授）

私の日本人論 《第1回》

アメリカ留学中の子供の誕生

KANEMATSU TAKASHI
兼松 隆之

建国200周年で賑う1976年7月、アメリカ合衆国ミネソタ州ミネアポリスのノースウェスタン病院に病理レジデントとして留学した。約1ヶ月後、家内が渡米し私に合流した。当時、彼女は妊娠4ヶ月であった。私が勤務した病院では、近々出産を控えた“夫婦”に出産や新生児について教育する「教室」が開催されていた。今では日本でも珍らしいことではないのかも知れないが、当時日本では妊婦のみが参加する母親教室があり、そのことが頭にあったため、アメリカでの教室には家内だけがテーブルコーダー持参で参加していた。これは毎週1回、午後7時頃から開催され、5回が1コースであった。その教室が2回位行われた頃、インド人の同僚のレジデント（彼の奥さんも妊娠中）が、「あの教室は夫婦で参加するもんだよ。君のところは奥さんだけが参加しているではないか。」と私に忠告してくれた。早速次から参加したが、確かに皆夫婦で熱心に聴講している様子に驚いた。しかし、これは素晴らしいシステムであることを痛感した。

長男が1977年1月24日の明け方、誕生した。主治医の産婦人科医は家内の出産のため午前3時頃、病院に来てくれた。私の顔を見るや、いつもと同じ笑顔で



ニューハノーバーメモリアル病院のスタッフとレジデント（右から2番目が筆者）

“How are you?”と声を掛け分娩室に入っていった。私も分娩中、家内の傍にいた。長男の名前は私の両親につけてもらった。また、我々が長男のミドルネームをエリオットとした。これは我々が住んでいた通りの名がエリオット通りであることにちなんだが、その由来をアメリカ人の友達に話すと大笑いされた。

アメリカの2年目はノースカロライナ州ウィルミントンにニューハノーバーメモリアル病院で外科レジデントのトレーニングを受けた。そこで次男が生まれた。長男は1歳3ヶ月で最も手のかかる頃だったが、友人達が何かと力になってくれた。家内は産後2日目に退院した。次男のミドルネームはフレドリックとした。お世話になった病理のボスの名前を頂戴した。今度は名前の由来を話しても笑われることはなかった。

異国での二人の子供の誕生。今にして思えば、夫婦だけでよく切り抜けてきたと思う。異国であるが故に周りの方々、友人の友情、親切、そして思いやりの心の暖かさが身にしみてうれしかった。忘れ得ぬ貴重な経験である。

（留学生指導主事・医学部教授）